

## 45 『傷寒論』における煎液の量と服用量に関する問題

石 珏<sup>1)</sup>, 鈴木 達彦<sup>2)</sup>, 遠藤 次郎<sup>1)</sup><sup>1)</sup>東京理科大学薬学部, <sup>2)</sup>北里大学東洋医学総合研究所

『傷寒論』の処方薬用量は大半が1日分で、これを2~3回に分けて服用するのが定法である。ところが定法と違い、煎液の全体量と1日分の服用量との間に過不足が存在する例が少なからず見出される。本研究では『傷寒論』『金匱要略』における薬の全体量と1回の服用量との違いの意図について検討を加えた。

①呉茱萸湯；4味，以水7升，煮取2升，去滓，温服7合，日3服。

②真武湯；5味，以水8升，煮取3升，去滓，温服7合，日3服。

①では、定法に従って飲むと1合不足し、②では9合余る。①の不足分は1回量に直すと小数点以下の分量なので無視するとして、②の余りの分量は無視できない。②に類する例が『傷寒論』では4例、『金匱要略』では10例見出される。

②に類する例の意図を考えるに当り、宋板『傷寒論』（以下『宋板』）と、その原形を残していると言われる『外台秘要方』が引用する『張仲景傷寒論』（以下『外台』）等との処方の調製法の比較検討を行った。

③甘草湯；1味，以水3升，煮取1升半，去滓，温服7合，日2服。（『宋板』）

④甘草湯；1味，以水3升，煮取1升半，去滓，温服7合，日3服。（『外台』）

⑤理中丸；水8升，煮取3升，去滓，温服1升，日3服。（『宋板』）

⑥理中湯；4味切，以8升煮取3升，去滓，温服1升，日3夜1。（『外台』）

同じ処方でも『宋板』の方（③、⑤）が服用量の整合性が取れているのに対し、『外台』の方（④、⑥）の服用量は整合性が取れず、1回分の不足が生じている。

1回の服用量ばかりでなく、煎液の全体量においても類似した問題が見出される。

⑦白虎湯；4味，以水1斗，煮米熟，湯成，去滓，温服1升，日3服。（『宋板』）

⑧白虎湯；4味，以水1斗2升，煮米熟，去滓内棗，煮取6升，去滓，分6服，日3服。（『外台』）

⑨甘草瀉心湯；6味，以水1斗，煮取6升，去滓再煎，取3升，温服1升，日3服。（『宋板』）

⑩甘草瀉心湯；6味，以水1斗，煮取6升，分6服。（『外台』）

『宋板』における1回の煎じる量は1日分を基準としている（⑦、⑨）のに対して、『外台』においては分服を指示しているものの、1日分という基準は設定していない（⑧、⑩）。

以上の諸事実から次のことを推測することができる。1. 『外台』所引の『傷寒論』がより原形に近いことから、原『傷寒論』は薬を煎じる量においても1回の服用量においても比較的自由的な裁量で行われていた。2. 『宋板』においては生薬の分量は『外台』と同じであるにもかかわらず、これを無理に1日分に作り直しており、調製法の画一化が行われている。3. 『宋板』において、⑨に見る如く「再煎」が行われるが、この作業は煎液を1日分に縮めるための1つの方策であったと考えられる。4. 『宋板』では煎液と服用量との間に過不足がある例は少ないのに対して、『金匱要略』で多い。このことは『金匱要略』の内容が雑多なため、調製法の整合性をとることが難しかったからと考えられる。5. 北宋代の医方書を見ると、『太平聖恵方』や『和剂局方』において、薬用量や服用法の規格化が進んでいる。『宋板』の薬の服用量の規格化は北宋に入ってからと考えられる。

規格化を行うに際し、臨床経験を経た改変であればよいが、単なる字面合わせで行われたとしたら、いささか問題であろう（例えば、白虎湯は今日⑦に基づき1日分としているが、本来は⑧のように2日分の分量であった）。『傷寒論』の薬用量や服用法はあくまで患者の状態に合わせて決定されるべきで、今日見る宋板『傷寒論』の分量に拘泥すべきではない。